

『みかぐらうた—人間救済・宇宙的交響の天理讃舞歌—』

井上昭夫著、日本地域社会研究所、2012年

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

天理教の信仰者は、大津波の被災地で、「ここはこの世の極楽や」と踊れるだろうか。

本書『みかぐらうた』刊行直後、私は著者の井上昭夫・前研究所長の自宅で、井上氏自身からこの問いかけを受けた。これは天理教の「公案」ともいべきものである。この鋭い問いかけに、私は考えこんだ。私は、福島、宮城、岩手と取材で歩いたことを思い出す。東日本大震災の大津波で壊滅した被災地の凄惨な状況が、脳裏に去来する。震災後、数か月は経過しているはずなのに、いまだある地域では見渡すかぎり、がれきの山が続いていた。ここはこの世の地獄であった。

通常の解釈だったら、後半部「わしもはやばや参りたい」との関連で、「ここ」は「おぢば」の意味に取るべきだとなる。あるいは、どこにいても心が澄みきった状態は「極楽」だと解釈する。しかし、そのような解釈ではどうにもならない悲惨な現実が今、自分の目の前にある。はじめの解釈では、被災地は「ここ」ではないということになってしまい、この歌詞は論理矛盾をきたしてしまう。あとの解釈では、すべては心のあり方次第とみなす心性還元論になり、社会性・公共性を喪失してしまう。では、「ここはこの世の極楽や」の「ここ」とはどこなのか？

私がこれらのことを矢継ぎ早に考えていたら、井上氏は次のようなことを言った。「ここはこの世の極楽や」の「ここ」は、今・ここで「みかぐらうた」を歌い舞っている人間にとっての「今」と「ここ」でなければならないはずだ、と。なるほど、これは非常に深い実存論の人間学的解釈である。してみると、大津波の凄惨な被災地であろうと、戦争による無残な廃墟であろうと、不法に閉じ込められた劣悪な監獄の中であろうと、「みかぐらうた」を舞い踊る限り、今・ここは「極楽」なのである。いや、正確に言えば、まさにその今・ここを「みかぐらうた」を通じて「極楽」にすることが要請されているのである。それでこそ、「ここ」を陽気ぐらし世界の場にする信仰の力が社会性を帯びてくるはずだ。実存哲学から公共哲学への道がここにある。私はそのように思案してみた。

私のこの勘は、本書を読み進むにつれて当たっていることを感じた。井上氏は、本書の中で、はっきりと主張する。『『みかぐらうた』において、『ここはこの世の極楽や』を信じ踊ることだけでは、個人的ユートピアの域を出ない。共同体としてこの世の極楽とは何であるかを志向しない宗教は世界宗教とは言えないだろう』と (333頁)。実に力強いメッセージである。

「みかぐらうた」の神的真理は時空を超越したものだが、人間はそれを世界の人々に通じる形で普遍化し、人間の言葉で語らなければならない。そのためには、学際的知識や芸術的感性、また社会の問題への批判的な問題意識が求められる。本書は、「みかぐらうた」をめぐって取り組まれた井上氏の天理実践教学の総決算ともいべき著作である。それは、「みかぐらうた」の無色透明な用語解説の域をはるかに脱したものだ。「日記」としての「みかぐらうた」は、言語的・舞踊的にはたしかに「よし」とされた。が、信仰実践においては永遠に「よし」とされることはない。どこまでも、「陽気ぐらし」実現への「人間的心の未成熟度に基づく絶対性を持っている」(18頁)ものとして存在

する。「みかぐらうた」をめぐるとこの巨大な問題群に、正面から取り組んだのが本書なのである。

井上天理実践教学は常に未来形の中にある。それは、「信仰実践体験を通して、つねに時代に適応し改革・再生される思想構築に向けての『きりなしふしん』を意識した『未来論』があるべき」(19頁)という意味である。井上天理実践教学は、その意

味で、この世に「陽気ぐらし」という「極楽」を創造する活学を志向する。本書は『ユートエコトピア』(2009年)の続編にあたり、陽気ぐらしのモデルたるべき「天理郷」建設の実現を夢見るものなのである。

本書には、現在の天理教学の現状への厳しい批判も盛り込まれている。しかし、その批判は逆説的かつ建設的なものだ。一つだけ例をあげれば、教内では「家族の絆」ということが盛んに言われ、教学に携わる者は異論もなくこれに便乗した議論を行っている。しかし、井上氏は言う。「我が天理教は、中山家という家族の徹底した崩壊からはじまり、伝統的世上の『家族の絆』を超越する厳しさから、教祖『ひながたの道』は始まったのではないか」(210頁)と。この逆説的問題提起こそ、内向きになりがちな天理教学を外向きに反転させ、教理の深い真理性を人々にあらためて反省させることで、前向きに発展させるよすがとなるのである。

本書の構成は次の通りである。

まえがきにかえて—『みかぐらうた』未来論—あらたな釈義展開の時代へ

- 第1章 「日記」としての『みかぐらうた』—「ことば」を味わう意味世界
- 第2章 「写本」としての『みかぐらうた』—「ことば」の逐条的解釈を超えて
- 第3章 『みかぐらうた』とエコ・スピリチュアリティ—アフリカでの実験
- 第4章 『みかぐらうた』とユートピア—教祖予言の「復元」と「元の理」

「まえがきにかえて」と第1章はいわば学際的「みかぐらうた」論の総説にあたり、第2章は解釈学的考察、第3章は実践教学、第4章は予言学に相当する。圧巻は第3章と第4章であろう。人類発生の地点・アフリカでの「天理エコヴィリッジ」の実践を通じて、人類宿しこみの大和の地場における壮大な「天理やまとユートエコトピア」の限りなく具体的なビジョンが提示される。これらの章は、アフリカで身上の障り(病い)を得て満身創痍になりながらも、天理未来都市を透視する井上氏の果てなきロマンと情熱がみなぎり、読む者に深い感銘を与えるものとなっている。

